

「令和7年産水稻の高温対策のポイント」

令和7年6月9日
埼玉県農林部

高温障害のリスク軽減には、葉色診断に基づく追肥が最も重要です。
ほ場を良く観察し、平年に比べ葉色が淡く感じたら追肥を検討しましょう。

1 気象予報と留意事項

気象庁が5月20日に発表した3か月予報では、6～8月の平均気温は60%の確率で高いと見込まれています。このため、水稻では白未熟粒等の高温障害の発生が懸念されますので、高温対策に重点を置いた肥培管理が重要となります。

また、「コシヒカリ」や「彩のきずな」などの中早生品種は高温により出穂期が早まりやすいので、幼穂の分化状況等を参考に追肥や「イネカメムシ防除」を適期に行うよう心がけましょう。

2 対策のポイント

(1) 葉色診断に基づく追肥

農業技術研究センターの5月1日植「コシヒカリ」の田植後30日の葉色は「3.9」（群落）で平年より淡く推移しています。

早植栽培の「彩のかがやき」では通常は中間追肥を行いませんが、高温年には必要となります。ほ場をよく観察し、田植後40～45日頃の葉色が葉色板で「4.5」（群落）を下回った場合は直ちに窒素成分で2kg/10a程度を追肥して葉色の維持に努めましょう。

高温年では「コシヒカリ」や「彩のきずな」でも葉色が低下している場合は、倒伏や過剰分げつにならない程度の追肥を行いましょう。

この時期に葉色が低下しすぎると、その後に穂肥を施用しても草勢は回復しにくくなるため、このタイミングを逃さないようにしてください。

(2) 中干し

適切な水管理による根の活力維持は、高温障害の軽減に重要です。

中干しにより無効分げつの発生を抑え健全な根系が発達し登熟が促進されます。有効分げつを確保したら中干しを確実に行いましょう。

中干しの期間は田面に小ひびが入る程度で、およそ7～10日間程度が目安です。大きなひびが入るような強い中干しは、根の発達を阻害するので、注意してください。

3 イネカメムシに注意

イネの穂を吸汁する斑点米カメムシ類のうち、近年、県東部や北東部を中心に「イネカメムシ」の発生が増加しており、発生地域は県内全域に拡大しています。吸汁により不稔や斑点米が発生し、多発した場合には収量・品質に大きく影響します。本年は越冬成虫が多いと見込まれており、広域的な防除が必要です。

「イネカメムシ」は6月下旬から7月上旬に越冬場所から水田に飛来すると考えられており、6月下旬以降、暑い日が数日続いたあとは注意深く水田を観察し、防除の準備を心掛けてください。



写真1 イネカメムシ成虫